

科学技術ジャーナリズムと市民運動

上田昌文

2001年11月23日に東京大学先端研にて開催された「STS(科学技術社会)ネットワークジャパン」の秋のシンポジウムに招かれ、上記のテーマで話をしました。ここに掲げるのはその際に参加者に配布したメモ(一部修正加筆)です。文章化していませんが読みづらいたくはないかと思いますが、おおよそのところをつかんでいただければ幸いです。土曜講座でも科学技術ジャーナリズムを扱った新しい企画を考案中です。ご意見などお寄せいただくと幸いです。(上田)

前提

科学技術に対する市民の2つの「ポテンシャル」について

(1)「自己学習能力」のポテンシャル

問題解決を迫られた素人の市民が自前で「リテラシー」を獲得していくことは、不可能なことでもないし、まれなことでもない。

そこで、ジャーナリズムに求められるのは、

・社会問題として深刻化する前に問題を「予見」し、社会の対応を促すこと

・問題解決に必要な種々のサポートを行なうこと

(2)「好奇心・親近性」のポテンシャル

科学技術に「ロマン」を感じている層は決して小さくないし、大半の子どもはそれを潜在させている。(例:ブルーバックス、『ニュートン』、バイオホラー小説の人気)。

・問題は一般市民が自らの生活とその「ロマン」が切り離されてしまっていること

・「暮らし」から切り込んでいき、暮らしを(良くも悪くも)変えるポテンシャルとしての側面を深く掘り下げることがポイント

・いわば生活者の視点を持って、科学技術の「現場」と市民を媒介するのがジャーナリズム

ジャーナリズムへの問題提起と提案

1. 問題の予見能力の発揮、その能力を高めるための方法の確立

例1:狂牛病;厚生労働省と農水省だけの問題ではない。欧州で大問題になった時点で、それを日本へ適用させた深い分析を欠いていたから。リスク対応や科学技術政策展開の体制的問題への認識が弱い。

例2:携帯電話問題;これも同様の経過をたどる恐れがある。2000年夏のザルツブルグ会議(土曜講座が翻訳した『議事録』がある)や英国のレポート("Mobile Phones and Health"Independent Expert Group on Mobile Phones2000年

4月)を代表として、その危険性を指摘する報告や会議が頻発。日本での報道はほとんど皆無。(これに関連した私たちの活動が『朝日』11月6日夕刊第1ページで取上げられた。)

・科学技術にかかわる意思決定・政策決定のしくみ、政策の戦略的な方向性について、世界的に把握しておく必要がある。(ジャーナリズムが科学技術政策システムもっと知ること。)

・先進的な政策展開や問題解決事例を深く分析し、日本での実現可能性に関して問題提起する。

2. 科学的未決と判断対立の状況を浮き彫りにさせ、問題提起をはかること

例3:所沢ダイオキシン風評被害問題;テレビ朝日の基本的貢献は大きい。

例4:JCO臨界事故;"誰が被曝したのか"という点についてはメディアは口をつぐんでいる。それゆえに、政府の調査活動の不十分さをほとんど示し得ていない。

例5:『The Ecologist』誌のDebateページ;往復書簡による対立点の徹底的な洗い出しが見られるが、学ぶべきだろう。

・中立不偏の立場の維持が最優先されるのではなく、科学的に未決の状況にあることそのもの、あるいは科学的判断をめぐって対立が生まれていることそのものを、広く公開することで、前進をはかる。

3. 情報アクセス、行動アクセスのためのサポートを最大限に行なうこと

例6:最近私のところに来たいくつかの相談;携帯電話基地建設、ワクチン国際支援、中学高校生の生殖障害、日本での炭疽菌.....。こうした問題の"紹介窓口"機能をメディアはなしえるだろうか?

例7:『週刊金曜日』市民運動案内板や国際運動誌のキャンペーンや情報案内欄;利用価値が高い。

・ジャーナリストが複数分野の"準専門家"になることはかなり大変。しかし、多くの分野にまたがる"情報と問題のエディター"になることはできるし、そうなることは必須であろう。その編集機能の一部に、市民からのリクエストをデータベース化しながら、必要なサポート機能を確立していくべき。

4. 科学技術の活動の総体的把握、市民との多様な接点の継続的なモニタリング

1) 双方向性とフォローアップの重視

例8:NHK「地球法廷」など;"取材"から"市民参加"へのシフトの価値

例9:TV番組のライブラリー化;批評の必要、それを資料とし

て活用できる場の必要

2) 理科教育・科学教育の"転回"とジャーナリズムの関与

例 10: "教科書教育"からの脱皮と体験型授業; 教員とジャーナリストの共同で、知の体験の演出を考案する

3) 運動誌と科学誌をどうつなげるかを探ること

例 11: 既存の科学雑誌や科学番組、運動誌の国際比較による評価; 『日経サイエンス』『技術と人間』『科学』『サイアス』『ニュートン』『Nature』『New Scientist』『The Ecologist』『New Internationalist』……を相互に比較して、科学技術分野で求められる報道の質と社会へのインパクトを検討する。

4) アジア、第三世界の視点の必要; 収奪の構造と科学技術の関わりを問うこと

例 12: アジア諸国のジャーナリストとの共同作業の展開; 国際市民運動の先進的な動きに注目すべきだろう。

資料紹介 (どようML「おもしろボックス」より)

求む原稿! (どよう券贈呈)

『わたしの哲学入門』木田 元 / 著 新書館・刊 1998年 本体 2800 円 + 税

もうずいぶんまえからずうっと、木田元氏(哲学者)のことが気になっていた。

それはこういうことである。

その理由の一つは、何十年もまえから、哲学書を少しずつ買い求めていた。定年にでもなって時間ができたら思い切って読んでやろうと集めているものだ。

その主な著作をあげてみる。メルロ・ポンティ(フランスの哲学者)では『行動の構造』、『眼と精神』、『シーニュ』、『弁証法の冒険』、『知覚の現象学』、『言語と自然』、『意味と無意味』、『見えるものと見えないもの』(以上、みすず書房)。フッサール(ドイツの哲学者)では『ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学』(中央公論社)、『イデー』、『内的時間意識の現象学』、『現象学の理念』(以上、みすず書房)など。また、カッシーラー(ドイツの哲学者)では『シンボル形式の哲学』(全四巻、岩波文庫)をはじめとするすべての著作などであるが、特に、私自身が勝手にわが師と思いこんでいる山本義隆氏が翻訳したものはすべて身を入れて読んできたが、いまだもって論評できるまでには至っていない。

ともかく、メルロ・ポンティ、フッサールの哲学書は、その都度、ぱらぱらめくって眺めてきてはいるが、その内容の難解さに閉口するばかりで、いつかと思いつつも、気を入れて読み込むには至っていない。これらの多くの哲学者の日本語訳者が木田元氏なのである。

二つ目は木田氏が私と同県人(山形県)であることである。西

洋の哲学を長年にわたり思索している山形県人(山形が好きなので)とは、いったいどんな人なのだろうと気になっていたのだ。

それが最近、偶然のことから、本書『わたしの哲学入門』を一気に読んだ。読んだというよりも「読めた」のである。うれしかった。本当に読みやすい。ちょっと横道にそれるが、「読めた」と書いて思いだしたことがある。作家の中村真一郎が晩年、軽い沢の別荘でこんなことを言っていた。

「この歳になってようやく横文字の小説が読めるようになったのですよ。不思議なものですな」と。その境地なのである。ともかく、グイグイ引き込まれていく。

1928 年生まれの木田氏が戦後の青年時代を経て哲学の研究にどのようにしてかかわっていったのか、なぜ、上記の書物を訳す作業に入ってしまったのか。実にストレートに述べられているのである。

木田氏が哲学研究の道に入った動機はただ一つ。ハイデッカーの『存在と時間』を読みたい一心からであった。しかしそのために、ハイデッカーの見た無数の哲学者を経由して古典哲学・ギリシャ哲学まで追いかけることになったのである。その思索の動向がよくわかるように書かれている。本書を読みながら哲学者の思索活動とはこういうものかと、あらためて知った。教わったことはたくさんある。哲学書を原書で読むことの意味、言葉の意味と歴史的背景、それに木田氏の哲学思索に対する謙虚な姿勢などである。

哲学などやってもまったく実用性と意味もないと考えられがちである。それでも哲学という学問をきわめたい人間が、時代状況のいかにかわからず、かならず一定数いる、この不思議さ。

そもそも「哲学」という得体のしれない日本語はどこからきたのか。自然、存在、本質、事実、現象、自由、主観、客観、理性・とはどんなことか。哲学の難しさは「言葉の作られ方」にある。木田氏はこの言葉の作られ方を時間・歴史・人物(哲学者)の絡み合いを、ご自身がたどられた紆余曲折な研究プロセスを丹念に振り返りつつ論述する。小気味がいいほど明快である。さらに哲学書にとりつく最良の方法は、何度も読みながら「読み慣れる」ことしかないともいう。

これまで哲学入門書など読んでもそれ自体が難解であった。本書は木田氏のこころの動きをご自身の言葉で語っているからであろうが、私にはこれまでになくわかりやすくとても勉強になった。

またまた思い出したことがある。

フランスにカリン・シムラというとびっきり優秀な 40 代の若き数学家(女性)がいる。数学家なら誰でも知っている。彼女と言い合いになったことである。それはパリだったかベルリンだったか忘れたが、ともかくすごい言い合いになった。彼女はメルロ・ポンティのファンである。当時の私はサルトル・ファンであ